岩手県大槌町の調査からみた東日本大震災をきっかけとする高齢女性の交流の変化と住まいへの意識

Thoughts on Residences and Changes to Modes of Socialization among Elderly Women affected by the Great East Japan Earthquake based on Interviews conducted in Otsuchi Town, Iwate

阿　部　一咲子 *　　平　田　京　子 **
Isako ABE　　Kyoko HIRATA

日本女子大学大学院紀要
家政学研究科・人間生活学研究科
第 23 号

岩手県大槌町の調査からみた東日本大震災をきっかけとする高齢女性の交流の変化と住まいへの意識

Thoughts on Residences and Changes to Modes of Socialization among Elderly Women affected by the Great East Japan Earthquake based on Interviews conducted in Otsuchi Town, Iwate

阿　部　一咲子*　　平　田　京　子**
Isako ABE　　Kyoko HIRATA

Abstract　Five years have passed since the Great East Japan Earthquake. The disaster-hit areas are still in the process of recovery. Both the recovery of objects and human remains should be considered concurrently. The interviewees in this study are elderly women in Otsuchi, who have experienced difficulties in regaining their social circles and homes. We focus on the changes in the modes of socialization and housing recovery they have experienced in an attempt to explore ways of recovery for these elderly women. Many of the subjects did not consider the functionality of their residences at the time of reconstruction. Also, they used meeting room or day-care center in temporary housings complexes they were provided with after the quake rather than inviting friends into their houses like in the past, thereby externalizing the function of socialization. We can therefore assume that external facilities serve as a substitute for neighborhood socialization.

Key words:　Great East Japan Earthquake　東日本大震災，Temporary Houses　仮設住宅，Reconstructed Houses　再建住宅，Neighborhood Socialization　近所付き合い，Interviews　ヒアリング調査

1. はじめに

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災発生から 5 年が経過し，被災地は復興過程にある。この東日本大震災の復興理念には，「創造的復興」が掲げられた。これは阪神･淡路大震災時に提唱されたもので，「単に震災前の状態に戻すのではなく，21 世紀の成熟社会にふさわしい復興を成し遂げる」[1] という趣旨である。しかし，今日の災害復興においては「人間復興」を掲げることが必要なのではないかと謳われている。「人間復興」とは関東大震災時に福田徳三によって提唱されたものである[2]。「人間復興」には，狭義の個人レベルの「人間復興」に加えて，それを支えるべき人びとの「絆の復興」，とりわけ「地域コミュニティと住民自治の復興」が不可欠であると言われる[2]。ここから，東日本大震災の被災地の復興には，住宅などのモノの復興を，近隣住民との交流や暮らし，なりわいなどの地域社会の再生，人間の復興の中に位置づけ，考慮するべきである。

高齢者は経済的な状況から自力での住宅再建が困難であることが多く，健康面などから交流を取り戻すことも難しくなるため，対象を高齢女性とする。

対象地は被災地の中で，多くの住民が分散居住をし，震災前に築いていた交流が分断されたと考えられる岩手県大槌町を選定した。大槌町は震災対策本部を開設している時に津波が襲ったため，復興に欠かせない町のリーダーシップを担う町長や役場の課長クラスの幹部，都市政策の職員も含め約 60 人が津波で流され行政機能を喪失した[3]。そのため仮設

*　家政学研究科住居学専攻
Graduate School of Home Economics, Division of Housing and Architecture
**　住居学科
Department of Housing and Architecture

住宅への入居も住宅ができた都度，応募，抽選を行い，住民の多くは分散した背景をもつ。

本研究の前段階とし，昨年大槌町の高齢女性を対象に，各自の交流状況を震災前，避難所，仮設住宅，再建住宅の時系列で調査した。結果，分散居住した高齢者は交流意欲はあるが，震災前と同等の交流の取り戻しは未だ困難であることを明らかにした[4)5)]。

この結果を受け調査項目の精度を高めると共に，高齢女性にとって望ましい復興を実現するための知見を得ることを目的に，モノの復興の観点から被災者の生活の基盤となる住まいを，人間の復興からは被災者の交流を取り上げ，両者の関係性を明らかにする。

2. 調査方法

岩手県大槌町内の仮設に居住する，または居住していた 19 名の 60 代から 90 代の女性に，2016 年 9 月，東日本大震災をきっかけとする交流の変化および住まいに対する意識に関するヒアリング調査を行った（Table 1）。調査項目を予め決め，対象者の回答に沿い追加質問を行うかたちをとった。調査はデイサービス施設で行い，調査対象者は主に施設利用者である。

Table 1　Summary of interviews

調査期間	2016年9月	調査場所	岩手県大槌町デイサービス施設及び対象者宅
対象者	デイサービス施設の利用者・大槌町町民 女性計19名（60代：3名，70代：4名，80代：8名，90代：4名）		
調査方法	ヒアリング（各自　一時間程度）		
主なヒアリング項目	・ 年代、震災前・仮設・再建住宅の居住地域、現在の住宅タイプ、同居家族など基本属性 ・ 震災前・仮設住宅・再建住宅での地域活動への参加の変化と理由 ・ 震災前・仮設住宅・再建住宅での近所付き合いと近所以外での付き合いの変化と理由 ・ 人付き合いに対する価値観 ・ すまいに対する価値観		

3. 調査対象地の被害状況と対象者属性

大槌町は，東日本大震災で被害の最も大きかった自治体の一つである[3)]。津波と大火で，Fig. 1 に示した市街地の町方地区が大きな被害を受けた。

Table 2 に対象者の年代や同居家族，居住地域の変遷などの属性を表した。震災前の住宅を修繕し，以前と同じ住宅に居住する人は，修繕と表す。対象

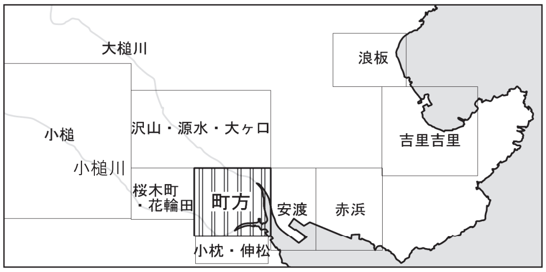

Fig. 1　District allocation of Otsuchi town

Table 2　Attributes and residential experiences of the subjects

	年代	同居している家族	居住地域			再建か修繕か
			震災前	仮設住宅	再建時	
A	90	息子夫婦	吉里吉里	吉里吉里	吉里吉里	再建
B	90		浪板	吉里吉里		
C	60	夫	安渡	吉里吉里	吉里吉里	再建
D	80		沢山・大ヶロ	吉里吉里		
E	70	夫	吉里吉里	吉里吉里	桜木町・花輪田	再建
F	80	息子夫婦 孫3人	吉里吉里	吉里吉里	吉里吉里	再建
G	90	息子2人	吉里吉里	吉里吉里	吉里吉里	再建
H	60	夫	吉里吉里	吉里吉里		
I	70	夫	浪板	吉里吉里 浪板	浪板	再建
J	80	息子夫婦	吉里吉里		吉里吉里	再建
K	70	夫・娘	浪板	吉里吉里	浪板	再建
L	80	息子夫婦	吉里吉里		吉里吉里	再建
M	80	弟	須賀	小槌	吉里吉里	再建
N	80	娘	吉里吉里		吉里吉里	修繕
O	90	息子夫婦 孫1人	吉里吉里	吉里吉里	吉里吉里	再建
P	60	夫 娘1人	吉里吉里	吉里吉里	吉里吉里	再建
Q	80	夫 孫1人	吉里吉里	吉里吉里		
R	80	夫	吉里吉里		吉里吉里	修繕
S	70		小枕・伸松	小槌	桜木町・花輪田	再建

者 19 名の内，16 名がデイサービス施設の利用者で，C，H は施設のスタッフ，S は大槌町の住民である。

対象者の居住地は，震災前に吉里吉里地域に 12 名が居住していた。その内仮設に入居した 8 名全員が吉里吉里に入居でき，再建時は 12 名中 9 名が同地域に住宅を再建したり，津波に流されなかった自宅を修繕し，震災前と同じ地域に居住した。

また，Table 3 に仮設および再建住宅の居住年数と知り合いの有無を表した。震災前に吉里吉里に住み，仮設も同地域に入居した対象者は，全員が仮設に震災前の知り合いが居住していた（A,E,F,G,O,P）。ヒアリングでも「仮設にきたときも吉里吉里の人たちがいっぱいで，仮設はよかった」（E）という声が聞かれた。ここから，吉里吉里の住民の多くが地域でまとまって仮設に入居できていたと分かる。

Table 3　Number of acquaintances and years of dwelling in temporary houses and reconstructed houses

	仮設住宅		自宅再建・災害公営住宅		
	居住年数	知り合いの有無	自宅再建期間	知り合いの有無 震災前	知り合いの有無 仮設
A	4年	○	2年	○	×
B	3年	×	／	／	／
C	1年	○	2年	○	○
D	2年	×	／	／	／
E	2年	○	1年4か月	○	×
F	2年	○	3年	○	×
G	3年	○	2年	○	○
H	3年	○	／	／	／
I	／	／	3か月	○	／
J	／	／	6か月	×	／
K	1年	○	4年	○	×
L	／	／	6年	×	／
M	2年	○	3年	○	○
N	／	／	／	○	／
O	1年	×	4年	○	×
P	2年	○	3年	○	○
Q	5年	×	／	／	／
R	／	／	／	○	／
S	2年	不明	2年	×	×

凡例：○…有　×…無　不明…無回答　斜線…該当しない

また，再建時も同じ地域に住宅を建て，震災前の知り合いとの交流を継続している。それに対して，仮設から知り合った他の地域の知り合いは，再建時には震災前の居住地などに移住するなど吉里吉里を出ることで，疎遠になっていた。

このように，今回の調査では震災前と同じ地区に居住できた対象者が過半数を超え，結果的に分散居住をしていない被災者が対象となった。

4. 住まいの再建に関する意識

3 章の基本的な属性を踏まえ，ヒアリングの結果から，対象者の住まいに関する意識と震災後から現在までの交流の変化を明らかにする。

4-1. 再建時に重視する要素に関する文献調査

まず被災者が再建時にどのような要素を重視するのかを把握するため，既往文献の調査[7)〜11)]から重視する要素を抽出し，共通項をまとめた。結果，11 項目が挙げられた。安全な高台などへ移転して住みたいなどの「土地の安全性」，公共交通・買い物が便利といった「生活の利便性」，医療施設・福祉サービスが整っているという「福祉」，職場へ通勤しやすい，漁業・自営業を続けたいという「仕事」，学校や保育所が近い，通学が便利という「保育・教育施設」，住み慣れた土地である，被災前と同じ場所に住みたいという「土地への愛着」，親しい知人，友人がいる，親や知人がいるという「つながり」，公営住宅に入居できる，戸建てに住みたいという居住形態，土地を持っているという「土地の所有」，元の市町村の復興やまちづくりに時間がかかる「住宅取得までの時間」，住居の補修に行政の支援が受けられる「行政の支援」である。本研究の対象は高齢女性のため，「仕事」と「保育・教育施設」の重視度は低いと判断し，項目から除外した。

4-2. 自宅再建に対する価値観

文献調査の結果を用いて，対象者の中でも自宅再建をした人，現在仮設に住む人を対象に，自宅再建時に何を重視したか，または再建する際に何を重視したいか質問した（Table 4）。表頭を対象者名，表側を重視項目とした。重視するものに○を付し，重視しない場合は×で表される。項目は，上から土地の安全性，生活の利便性，福祉，土地への愛着，居住形態，つながり，住宅取得までの時間，行政の支援，仕事の 9 項目に分類した。

Table 4　Elements emphasized at the time of reconstruction

重視項目	再建時												仮設住宅		
	A	C	E	F	G	I	J	K	L	O	P	S	D	H	Q
安全な高台などに住むこと	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
再建住宅の近くに商店や郵便局などがあること	○	×	×	×	×	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×
再建住宅の近くに病院などの医療機関があること	×	×	○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○
住み慣れた地域に再建すること	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
戸建てか、集合住宅か、望む居住形態で再建すること	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○
再建住宅の近くに知り合いがいて、交流すること	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○
住宅に早く入居できること	×	○	○	×	×	／	○	○	○	○	○	○	×	○	○
再建するにあたり、行政の支援が得られること	／	○	×	×	×	／	／	×	○	○	○	×	○	○	×
再建場所が職場に近い・行きやすいこと	／	○	／	×	／	／	／	／	／	／	○	／	／	○	／

凡例：○…重視する　×…重視しない　斜線…該当しない・無回答

調査の結果，全ての項目を回答者数の過半数が重視していた。そこで各項目に関して回答者全体の内，何割が重視しているか着目したところ，80％以上と高い割合で重視していたのは土地の安全性，土地への愛着，居住形態，つながりであった。中でもすでに再建した回答者の 80％以上が重視したのは土地の安全性，土地への愛着，つながりであった。

また，ヒアリングで現在の住まいに対する不満点を聞いたところ，部屋の間取りや住宅の性能に関する意見はほとんど聞かれなかった。「自宅再建と災害公営住宅，どちらを考えたか」という問いに関しても，現在実際に自宅を再建している 10 名の内，6 名が再建は子どもが行い，それに従うかたちであったり，夫の意見を優先して再建していた。このように自身の意思で，主体的に住宅再建に取り組む姿勢がない現状もあることが分かった。

この結果から，対象者のほとんどが自宅再建において住宅の性能を重視しないことが判明した。対象者は住宅の性能よりも住み慣れた地域に住むことや，生活の利便性，津波が来ない安全な高台であるといった住宅の立地，知り合いや家族，親戚の近くに住むという周囲の人との距離感を重視している。

5. 震災前から現在に至るまでの交流の変化

次に，交流の変化をみる。対象者の交流状況を調査する際，既往文献 [12] に挙げられた分類を参考に，交流の深さを 2 種類に分類した。家の中には入らず，道端や家の前などで話をする「立ち話」と，より親密な相手を招いたり，招かれたりして部屋の中で交流をする「家の行き来」である。この交流に関し震災前，仮設，再建時という時系列ごとに，震災前を基準に人数，頻度の増減と，交流相手がどの時期に知り合った人であるかをみていく（Table 5,6）。

5-1. 立ち話をする交流

立ち話をする交流に関し，震災前は I，R を除く全員交流があったとしていた。また，多くの対象者が毎日話をする相手がいた。I は夫が退職し，生まれ故郷である大槌に戻ってきたため，当時知り合いがおらず，交流がなかった。仮設に入居した 14 名中，交流する人数が増加したのは 3 名，変化がないのは 5 名，減少したのは 6 名だった。また頻度は 4 名が増加し，4 名は変化がなく，6 名が減少した。

Table 5　Changes to modes of socialization: standing and talking

	立ち話をする交流							毎日のように立ち話をする人の有無		
	震災前交流の有無	人数		頻度		相手				
		仮設住宅	再建時	仮設住宅	再建時	仮設住宅	再建時	震災前	仮設住宅	再建時
A	○	変化なし	減少	増加	減少	震災前	震災前 現在	○	○	×
B	○	減少	／	減少	／	仮設	／	○	／	／
C	○	増加	変化なし	増加	変化なし	震災前 仮設	震災前	○	○	／
D	○	減少	／	減少	／	仮設	／	○	×	／
E	○	変化なし	減少	変化なし	減少	震災前	震災前	○	○	×
F	○	減少	減少	変化なし	変化なし	震災前 仮設	消滅	○	○	×
G	○	変化なし	変化なし	増加	減少	震災前	震災前 仮設	○	○	／
H	○	減少	／	減少	／	震災前	／	○	×	／
I	×	／	増加	／	増加	／	震災前	×	／	×
J	○	／	減少	／	減少	／	現在	○	／	×
K	○	変化なし	変化なし	変化なし	変化なし	震災前 仮設	震災前	○	○	○
L	○	／	消滅	／	消滅	／	消滅	×	／	×
M	○	増加	減少	変化なし	減少	震災前	震災前 仮設 現在	○	○	○
N	○	／	増加	／	減少	／	震災前 仮設 現在	○	／	○
O	○	減少	増加	減少	増加	震災前 仮設	震災前	×	×	○
P	○	増加	減少	増加	減少	震災前 仮設	震災前 仮設 現在	○	○	×
Q	○	変化なし	／	減少	／	震災前 仮設	／	○	○	／
R	×	／	変化なし	／	変化なし	／	／	×	／	×
S	○	減少	減少	減少	減少	／	震災前	○	○	／

凡例：○…有　×…無　斜線…該当しない・無回答

Table 6　Changes to modes of socialization: coming and going home

	家を行き来する交流							
	震災前交流の有無	人数		頻度		相手		交流タイプ
		仮設住宅	再建時	仮設住宅	再建時	仮設住宅	再建時	
A	○	変化なし	消滅	変化なし	消滅	震災前	消滅	訪ねる
B	○	消滅	／	消滅	／	消滅	／	招く 訪ねる
C	○	消滅	増加	消滅	増加	消滅	震災前	招く
D	○	消滅	／	消滅	／	消滅	／	招く
E	○	減少	減少	減少	減少	震災前	震災前	招く 訪ねる
F	○	消滅	増加	消滅	増加	消滅	震災前	招く
G	○	消滅	増加	消滅	増加	消滅	震災前	招く
H	○	消滅	／	消滅	／	消滅	／	招く
I	×	／	変化なし	／	変化なし	／	変化なし	訪ねる
J	○	／	減少	／	減少	／	現在	訪ねる
K	○	消滅	増加	消滅	増加	消滅	震災前 仮設	招く
L	○	／	減少	／	減少	／	減少	招く 訪ねる
M	○	増加	減少	増加	減少	震災前 仮設	震災前 仮設 現在	招く 訪ねる
N	○	／	減少	／	減少	／	現在	訪ねる
O	○	減少	消滅	減少	消滅	仮設	消滅	訪ねる 招く
P	○	変化なし	減少	増加	変化なし	震災前 仮設	震災前	訪ねる 招く
Q	○	消滅	／	消滅	／	消滅	／	訪ねる
R	○	／	減少	／	減少	／	震災前	招く
S	○	減少	消滅	減少	消滅	震災前	消滅	招く

凡例：○…有　×…無　斜線…該当しない・無回答

再建すると 15 名の内，交流する人数が増加したのは 3 名，変化がないのは 4 名，減少・消滅したのは 8 名だった。頻度は 2 名が増加, 5 名は変化がなく，9 名が減少・消滅した。

仮設で交流人数が増加した C,M,P，変化がない A,E,G,K,Q の 8 名中，A,E,G,P,Q は震災前と同じ地域の仮設に入居した。反対に交流人数が減少した 6 名の内，B,D,S は震災前と異なる地域の仮設に入居した。同じ地域の仮設にまとまって入居したため，地域のつながりを維持でき，仮設時に交流が増加した，または維持できたと推測される。

また，仮設で交流が増加した対象者から，「仮設では積極的に話をしないとと，ひしひし感じた。必死さを感じていた」（C）や，「仮設はまとまっているから，顔見知りの人に声をかけられるし，顔を合わせる機会が増えた」（P）という意見が聞かれた。

日常とは異なる事態での交流への意識の芽生えや，仮設での人との距離感の近さも，交流が増加，維持できた要因だと推測される。また，仮設で交流が増加した・または維持した 8 名中，A,E,M,P の 5 名は再建後に交流人数・頻度両方が減少した。

5-2. 家を行き来する交流

家を行き来する関係に関しては震災前に I 以外の 18 名に交流があった。I は立ち話同様，引っ越してきたばかりだったので交流がなかった。仮設に入居した 14 人中，交流する人数が増加したのは 1 名で，2 名は変化がなく，11 名が減少・消滅した。また頻度は 2 名が増加し，1 名は変化がなく，11 名が消滅・減少した。再建すると 15 名の内，交流する人数が増加したのは 4 名，変化がないのは 1 名，減少・消滅したのは 10 名だった。頻度は 4 名が増加，2 名は変化がなく 9 名が減少・消滅した。

「近所の人たちは皆お茶を飲んだりしていた。」（H）の言葉に表れるように，震災前に I 以外の人たちは近隣同士での家を行き来をしており，昔からこのような交流が行われ，習慣化していたことが伺える。しかし仮設に移るとその交流は減少・消滅の動きをみせる。理由に「仮設は寝るためだけの場所だった」（F），「寄って行ってと言っても，座る場所がない」（H）が挙げられ，多くの対象者が共通して仮設の狭さを家の行き来を阻む問題に挙げた。

この仮設の狭さの問題は再建後に解消するはずだが，実際に交流人数・頻度が増加したのは C,F,G,K の 4 名のみだった。再建し住宅の性能の問題である狭さを解消しても，震災前に対象者のほとんどが行っていた交流を取り戻していないことから，震災前の交流を取り戻すことを阻む要因が他にあると考えられる。

6. 地域住民との交流の変化に影響した要因

このように対象者は交流を取り戻した人と, 減少・消滅した人とに分かれ，特に親密な家を行き来する交流は減少・消滅した人が多いことが分かった。地域の交流が減少，消滅した対象者に注目すると，その理由の 1 つとして，震災前のコミュニティが親密で，新しく地域に入り交流を築くことが困難であることから「地域に馴染むことへの諦め」が生まれる問題がある。この諦めに関わる言葉を回答から抽出し，分類した。結果，交流の減少に対し影響した要素は自身を原因とする問題と，相手との双方向性を原因とする問題に分かれることが分かった。どのような問題が存在しているのか，考察する。

6-1. 自身を原因とする問題

まず自身を原因とする問題には，健康上の問題がある（Table 7）。「足が悪いので仮設の時，家の行き来をしなかった」（G）や，「車いすなので家の行き来はない」（Q）というように，健康上の問題から地域に馴染むための行動を起こせなかった。

Table 7　Health problems

	健康上の問題
A	・ 年よりだからどこへでもは出られない。
B	・ 耳が遠いので、家族に電話もしない。
G	・ 理由は特にないが、足が悪いので仮設のとき家の行き来をしない。
J	・ 知り合いの家が遠くて、この年で歩くのが大変。
Q	・ 体が悪いし、誰とでも話しかけると、助けてもらえるかなと思って声をかける。 ・ 脳梗塞のため昔の友人と交流ができない。 ・ 家の行き来はない。車いすなので。夫もいるのでスペースもないし、上がらない。

次に，高齢を理由とする遠慮，意欲の低下がある。Table 8 に表す通り, 自身が高齢であることから，立ち話，家の行き来などの近隣との交流をはじめ，イベントに対する参加の意欲も低下している。

このように対象者自身の問題では，交流を求められない事情がそれぞれにあることや，高齢を理由にして交流に対する意欲が低下していた。

Table 8　Problems related to refraining on the grounds of age and lowering of motivation

	高齢を理由とする遠慮・意欲の低下の問題
A	・ 仮設住宅で若い人が集まっていると、行くと悪いかと思って遠慮していた。
B	・ 人と話したいと思っても、耳が遠いので遠慮する。 ・ 毎日広間で話してるけど、耳が遠いから難しい。
G	・ 近所の人とは、年もとって耳も遠いから、あんまり話したりはしない。朝の挨拶くらい。
J	・ 年だから、あまり人のことを聞くのもいらない。 ・ 震災前と今で、5つも年齢が違う。自分も変わってしまった。
L	・ 年だから遠慮している。80歳が出る幕じゃない。 ・ 娘が近くにいてたまに来るけど、それ以外はまだ。近所の人はまだ。引っ越したばかりだからまだない。年だから別にあたりの人たちとお話しすることもない。もうすぐ90歳だし。 ・ 近所でまだ立ち話をする人はいない、引っ越したばかりで、あたりのことはわからない。年で家にいるし。
O	・ 祭りは見ることはあるけど、参加はしない。ただ見るだけ、年よりだから。若い頃はやっていた。 ・ 自分も年だから広く交流はいらない。いっぱい友達がいたが、自分も年だから、家族にもそんなに手を広げないでと言われるから。
R	・ 若いときはしていたが、今は踊ることができないから祭りには参加しない。 ・ 震災前もそんなにイベントには参加していなかった。若いときもあまり参加していなかった。22歳くらいで結婚して、その前も活発ではなかった。 ・ 何でも年だから、と思う。若い人も優しく声をかけてくれて、感謝はするが、交流まではいかない。
S	・ 年だから地域のイベントにはあまり参加しない。祭りは大好き、神様もすき。

Table 9　Problems related to participation in events

	イベントへの参加			
	仮設		再建	
	有無	意思	有無	意思
A	○	誘われて	○	積極的に
B	○	積極的に		
C	○	誘われて	×	
D	○	積極的に		
E	○	誘われて・積極的に	×	
F	○	積極的に	○	積極的に
G	○	積極的に	○	積極的に
H	×			
I	×		×	
J			○	積極的に
K	○	誘われて	×	
L			×	
M	○	積極的に	×	
N			○	誘われて・積極的に
O	○	積極的に	×	
P	×		×	
Q	○			
R			×	
S	○	積極的に	×	

凡例：○…有　×…無　斜線…該当しない・無回答

6-2. 相手との双方向性を原因とする問題

次に，相手との双方向性を原因とする問題を取り上げる。まず地域に馴染むためのイベントが無いという問題がある。Table 9 に仮設，再建時におけるイベントへの参加の有無と参加態度を表した。再建後は再建した対象者 15 名中，10 名が地域のイベントに参加していなかった。そのうち，イベントがないので参加できないと 2 名が回答した。参加する意思の薄さも問題であるが，そもそもイベントが企画されていなければ意思があっても参加できない。

また，地域性の違いも理由の 1 つである。調査でも対象者は生まれてから同じ土地にずっと住んでいた人が多く，それが当たり前という意識があった。そして近隣住民と互いの家族の話をするような関係性を築いてきた。そのため Table 10 に表した通り，地域が異なると共通の話題がないという現象が起きる。また，仮設で異なる地域の人と一緒に生活をすることになり，そこでトラブルに巻き込まれたことから，他の地域から来た人に対しよそ者意識を強めた人もいた。このように共通項をもたないことと，嫌な思いをした経験が要因の 1 つに挙げられた。

他世代との隔たりを感じたという意見を Table 11 に表す。仮設で集会所を利用していたが，若い人がいると邪魔をしてはいけないと，集会所に行くことを遠慮したり（A），再建先で声をかけたが拒絶

Table 10　Problems related to differences in regional characteristics

	地域性の違いの問題
B	・ 仮設にいる頃は近所の人も一緒だったからお話ししたりもあったけれど、デイサービス施設に入ってからはサポートセンターに来るお年寄りと話している。皆さん吉里吉里の人たちだから。分かっている方が多いので。
C	・ 生まれた頃は吉里吉里なので知っている。しかし、安渡は震災前子どもと共に過ごしていたので、馴染みがある。
D	・ 震災前は立ち話で猫・犬の話、息子は元気か？など、たわいのない話。でも仮設の人とこういう話はしない。知らない人と一緒だから、仮設の人は。 ・ 仮設の人は若くて、冷たい。元いた土地と違うからか変わった。
E	・ 土地を知らないから、面白みがない。 ・ 知ってる人がいないので、地域のイベントに参加しない。
F	・ 色んな人がいて、この土地にお嫁にきたらしい人がいた。隣の仮設の人とも会わないし、よくわからない人だった。 ・ 仮設内でこわいひとと言われている人がいる。
H	・ 地域が違うと、同じ町内だとしても話が難しい。 ・ 地域性がある。お話しを常にできる地域とそうでない地域がある。 ・ 地域性の違いを仮設になってから感じる。
L	・ 吉里吉里にいたい、他の土地のことは分からない。他にはいきたくない。愛着がある。
M	・ 浪板のお茶っこの会にはデイサービス施設とは違う人がくる。浪板の人はデイサービス施設にあまり来ない。皆仕事がある。流されてない人は畑仕事がある。流されていても、この施設は吉里吉里の人が中心なので来ない。 ・ 吉里吉里の人は家にあがったりする。果物をもらったりした。おすそ分けをしていた。皆そのようにしている。いとこには夫が亡くなってから、世話になったので。
P	・ 仮設では他の地域の人も入ってきて、怖かった。パトカーもしょっちゅうきていて、いやだなという思いが強い。
S	・ 仮設イベントにはあまり参加しない、知らない人ばかりなので。 ・ 地域性が違う小枕に何十年もいたので、交流はあまりない。小枕ではお茶のみをするところがあったが、桜木町は違う。

Table 11　Problems related to gaps with other generations

	他世代との隔たりの問題
A	・年よりだからどこへでもはでられないが、皆若い人は、どこかに集まってお話ししたり、お茶を飲んだりしていた。年よりだから、行くと悪いかと思って遠慮していた。
D	・仮設の人は若くて、冷たい。元いた土地と違うからか、変わった。
E	・若い人は自治会はいらない。 ・隣近所に声をかけても、話を聞いてくれるのか、と思う。どちらかというと今は若い人が近くに多い。 ・立ち話で声かけても、かけてこない。声をかけていいか悪いかもわからない。何を考えているかわからない。挨拶くらい。
F	・若い人は仕事があるからいないし、デイサービス施設に来るしかない。
G	・忙しいんだか若い人は来ないから、朝の挨拶はするけれど、今の人は家の中に入ってお茶のみをしない。昔の人はしたけれど。
J	・若い人や、働いている人が多くて話す人があまりいない。
R	・今は周りは若い人たちばかり。話をするといっても、外にあまりでない。デイサービス施設がいいので、いつも心はデイサービス施設に向かっている。 ・若い人はどこかに行ってお茶っこのみという気持ちはない。若い人は若い人同士の交流があるから、自分がすすんでいくことはない。この年になれば、若い人の邪魔にならないようにとしている。その気持ちが強い。

されたり（E），最初から若い人は若い人同士の交流があると割り切っていた（R）。交流を求めても，若い人は仕事で日中おらず，交流できない実態もあり，これらが世代の溝を深くしていると推測される。

また，相手や自分が家に引き籠ることがある。仮設の時期に特にみられ，また，再建住宅でも今までの戸建て住宅からアパートなど集合住宅へ移ると，外から見て相手が家にいるのか分からず，どの部屋に誰が住んでいるか分からなかった（E）。集合住宅での話し合いにも参加する人が少なく，交流の障害要因となっている（Table 12）。

それに加え，外で交流しようとしても相手が見つかりにくいという問題がある。仮設でも再建住宅でも日中は外に人が少ない様子がみられるが，特に再建住宅でみられた（Table 13）。

このように自分自身と相手との双方向性の問題では，交流する機会の喪失や，世代間，地域間など様々な隔たりが存在することがわかった。

以上のように，自分自身の問題と相手と自身との双方向性という 2 つの問題が作用し，地域に馴染むことや近隣住民との交流を阻む要因となっている。

7. 高齢女性が求める交流

これらの問題に起因し，地域の交流は減少した。中でも Table 6 から伺えるように，地域に根付いて

Table 12　Problems related to people not leaving their houses

	家に引きこもる問題
B	・仮設では集会所などにいかず、部屋に籠っていた。外に出たくなかった。 ・仮設では交流したいという気持ちはなかった、人自体がいなかったから。 ・デイサービス施設に来る前の仮設では、お話しをする人もいなかった。
D	・仮設では人がこないから、自分の殻に籠ってレース編みをしている。
E	・再建した住宅では、滑り台もブランコもあっても、子供の背丈くらい草があっても誰も刈らない。旦那が草を刈ったら子供たちが一斉に来た。こんなに子供たちが待っているのに、だれも草を刈らない。皆が歩く道路も、夫が草を刈った。こんなもんか、自分さえよければいいのかと思った。悲しかった。 ・アパートの話し合いにも4人しか来なくて、話し合いにもならなかった。 ・皆外に出ない、買い物先であっても、草をぬいているときでも、こっちから挨拶をしないと返ってこない。 ・どの部屋に誰がいるか、アパートでは誰がいるかはわからない表札はあるが、あとは気にはしない。
H	・仮設の人たちが仮設から出ないから、人がいない。 ・仮設の部屋に籠っていて、何をしているのかと思う。 ・集会所などでイベントがあって参加できる人はいいが、その中に入っていけない人もいる。そういう人はどうなんだろうとは思う。
K	・仮設では気持ちに余裕がない、先が見えないから。この先どうなるかとか、いろんな不安がある。
M	・再建住宅では、いとこ以外とは家の行き来はない。お茶のみにいらっしゃいと言っても、来ない。
N	・皆海を見るのが恐ろしい。養殖で生きている人も、閉じ籠るようになった。
O	・毎日のように立ち話する人はいない。仮設の時部屋に閉じ籠っていた。籐の籠を編んでいた。昔から。それをずっとしていた。

Table 13　Current daytime status in which there are few people in neighborhood

	日中に人がいないという問題
B	・仮設で交流したいという気持ちはなかった。人がいなかったから。
C	・現在の家は民家が全然ない、高台ばかり。 ・子どもの時からの知り合いはいるが、散り散りになった。ほとんど遠くに行った。家族が亡くなったとか、遠くにいる子どものところに行ったとか。
D	・今の仮設では住宅があっても、立ち話をするようなことはあまりなかった。人がいなかったから。
J	・立ち話は、おはようぐらいの挨拶。天気のこと。若い人や、働いている人が多くて話す人があまりいない。
K	・再建した今は、家の周りに3，4軒しかないので少ない。 ・道路の向かいの人としか交流しなくなった。前はもっと家があった、昔話などしていた。 ・今は頻繁に話をするのは向かいの人だけだが、以前は家の周りにもう少し住宅があって、話をしていた。何十年も付き合っているからわかっていて、共通の話があった。地域のお話しとか、昔のはなしなどしていた。でもその家は離れてしまった。
N	・吉里吉里の祭りはとても賑やかだったが、道路も不自由だから今は人が減った。人口が減った、若い人も減った。 ・吉里吉里2丁目は家が200軒くらいあったが、今は50位。
O	・今の家だと人が全然いないし、本当にここに家が建つのかと思う。元のように家が建つのかなと思う。もっと高台に家を建てている人がいるから。

いた家の行き来は震災後に多くの対象者が消滅，減少したと感じている。一方で震災前の交流を取り戻すことが，一般的には理想的な交流であると考えられる。では対象者は震災前のような家を行き来する親密な交流を求めているのか，対象者の求める交流を探る。Table 14に求める交流の頻度，深さ，範囲，今後交流していきたい相手を表した。

求める交流の深さは，家を行き来する交流を求めたR以外は「近所とは挨拶程度でよい」や「深くはいらない」と答え，震災前ほどの親密な付き合いを求めていない。またRも今後交流したい相手は特になく，今交流のある相手と継続したいとしている。

次に交友範囲に着目すると10名が広くもちたいとしていた。しかし実際に交流したい相手は，対象者の多くが親戚や家族,同級生などの友人,デイサービス施設での知り合いなどすでに関係性をもっている人のみを挙げ，交流相手を広げようとしているのは「全ての人と交流したい」と答えたQのみであった。広く持ちたいとしたA，Iの「知り合いが多いほどいい」「なかなかできないけど，付き合いたい気持ちがある」という言葉や，H，Nの「色んな人と話す」という言葉から，広く持ちたいとした人の中には理想として広く付き合いたい気持ちがある人と，実際に行動し広く付き合っている人がいることが分かった。また，広く付き合いたいとの理想をもつが実際に行動に移していない人も，現状に対する不満は聞かれず今の交流を維持している。

このように，対象者の多くが震災前の親密な付き合いを求めておらず，また理想として広い交流をもちたいとはしていても，交流範囲に対する不満の声などは聴かれない。ここから震災前の家を行き来するような親密な交流が消滅，減少しても，対象者は交流に対しあまり物足りなさを感じていないことが推測される。

8. 近隣との交流を代替えする機能

一方，対象者が震災後に手に入れた新たな交流のかたちは，デイサービス施設や仮設の集会所のような「拠点での交流」である。

仮設では，前述したように狭い家に人を招けない問題があった。そのため，多くの人が仮設の集会所で住民同士交流していた。集会所では常に人が集まって話をしたり，イベントが催されていたりと常に誰かがいるという安心感があった。交流を求め拠点を訪れるとそれに応える相手が必ずいて，求める交流を得ることができた。またイベントを通じて共通の経験をするため，相手が初対面やそれほど親しくない場合でも打ち解けることができた。

デイサービス施設はこの集会所の機能に加え，施設から自宅までバスでの送迎を行っている。このことが友人の家に歩いていくことができないといった，Table 7に示した交流をするために行動を起こすことが困難という,健康上の問題を解決している。また施設に通うことは自主性に任されているため,交流を欲する人が通うことになる。そのため前述した交流を求めていない相手に無理に交流を求め期待を裏切られ，傷つくこともなかった。

またTable 2からもわかる通り，デイサービス施設に通う高齢者の多くが吉里吉里地域の出身者である。施設のスタッフからも「吉里吉里の老人たちが集まる場所になっている」という言葉が聞かれた。吉里吉里地域内でも以前に住んでいた場所は行政によって立ち退き対象になり，以前とは異なる区域に居住している人も多々見られる。そんな中，地域の老人たちが集まるこの施設は地域住民の交流を結び直す拠点にもなっている。また，施設には吉里吉里以外の地域の人も通ってきている。このように，震災前のコミュニティを結び直すのみならず，新たな交流を生み出す場にもなっていた。

本来住宅に備わっていた機能である接待や交流の機能は，今や被災地で集会所や施設のかたちをとることで，外部化してきていることが推測される。他者と交流をしたり，もてなしたりする行為を，住まいの外で行うようになったことが調査より分かった。そして拠点での交流，つまり仮設の集会所や,デイサービス施設での経験から，得ることが困難な地域の交流を拠点での交流で代替えするようになったと推察される。実際に今後交流をしたい相手にA,B,D,E,G,I,J,Rの8名がデイサービス施設の人々を挙げた。その他にQは「趣味の友達や同級生は人数が減った，頻度も下がった。その代りにデイサービス施設で話すようになった」とし，対象者の多くが拠点での交流を利用し,交流状況の減少をおさえ,安定させていることが分かった。

Table 14　Ideal modes of socialization victims aspire to

	頻度	深さ	交友範囲		相手
			狭い or 広い	その他意見	
A			広い	・知り合いが多ければ多いほどいい。交友関係は広くもちたい。	・デイサービス施設の人。 ・人とあまり喧嘩しないように、皆と仲良くお話しをしたりしたい。デイサービス施設に来れば皆と仲良くお話しをするから、そういうようにしたい。 ・吉里吉里中学校仮設に居た時から、デイサービス施設に通っていた。
B	・毎日広間で話しているけど、耳が遠いから難しい。		狭く	・あまりいらない。	・話したいと思っても、耳が遠いから。 ・デイサービス施設で集まりがあるから、自分でこの人と会いたいなと思わない今は。ここで会うから。
C	・べったりくっつくのもよくないし。 ・デイサービス施設にいれば皆と仲良く話すし、皆と仲良く、会話に困らない程度に欲しい。 ・交流には困っていない。	・深くしたくない、深く入り込むのは好きでない。 ・親しい仲に礼儀ありという考えを大事にしている。	広く		
D	・毎日は嫌、相手の都合に合わせてほどほどに。 ・相手によるが、毎日は無茶だ。親しくても、間をおかなくてはいけないと思う。 ・兄弟にも言えないことを話せる人もいたが、今はいない。	・立ち話程度。	広く		・デイサービス施設のスタッフや仮設の人。 ・デイサービス施設の皆がいいから。あまり近くても駄目だが、ほどほどに間をおいて。
E	・自分にすればデイサービス施設が一番だから、毎日会いたい。 ・あとはそれぞれみんなの生活があるからあまり用はない。ここは毎日会っても話がしやすい。デイサービス施設が大事。	・話すことが難しいことを話せる相手とは、深い話をしたい。	広く		・デイサービス施設の人や、話しやすい相手。 ・デイサービス施設の人は震災の話など、あまり話すのが難しいことも話せる相手だと感じている。
F	・予定のあった時。				・家族。 ・兄弟と元気で交流しなきゃいけない、元気でいなくてはいけないと思っている。 ・そのために自分の健康を保って、兄弟の健康を祈る。家が建つまで元気でいたい。
G	・毎日。 ・デイサービス施設で毎日会っているから。自分はデイサービス施設に来るのを毎日休まないから。	・お友達とは毎日、日常的な会話を話したい。 ・家族のようなことは言わない、友達でも。深いこと、真剣なことは子供たちに話す。	広く		・友達、家族など、今の人で満足している。充分。デイサービス施設に来ている人たちと毎日交流できるから満足。
H	・月一回くらい、こういうことがあったという話をする機会があったりしてもいい。 ・毎日あってもいいかもしれないが、女は言わなくてもいいことを言ったりする。馴れ合いになると駄目だと思っている。べったりはだめ。 ・近所は毎日挨拶したり、たまにお茶のんだりすることはいいと思う。 ・自分がずっと仕事をしてきたことが影響しているかもしれない。今日も会う、明日も会うというようなことはなかった。極力今日休みだとかは言っていたから、そういうのがいいんじゃないかと思う。 ・いくら全部分かっていても、女は言わなくてもいいことを言ったりするから、そういうのは好きではない。期間をおいて。今までそうだったから。色々見えてきたりするし。	・深く立ちいらない。	広く	・色んな人と話す。 ・声をかけられたら、かけるとか、ずっとやってきたかんじで。あまり狭めるとか広めるとかは考えたことがない。 ・この仕事もお客さん商売だから。色んな人に会って話す仕事なので広く持ちたいと思う。	・親族、兄弟。 ・親族はみんな退職している。そういう人たちと月一回なにかの会を催して、老後を楽しみたいと思っている。女だけでも4、5人いるので、そういう人とお茶のみだけでなく、何かのコンサートにいったりなど企画したい。そうでないと何もないところで年とって死ぬのは嫌だ。楽しまなければと思う。提案して、そういう会をつくっていきたいと思っている。 ・あとは楽しみは年一回、東京に孫の顔を見に行くこと。それを楽しみに生きている。 ・ここにいて何も楽しみがない。仕事に行って帰って、寝れば終わり。前だったら月初めの全体会議の後に女だけで釜石などに行って食事をしてカラオケに行ったりしていたけど、そういうのがなくなった。道路もなくなったし、あたりも暗くなったし。やっぱり楽しみたい。そういう時間がはやくこないかと思う。家を建てなくてはと思うが、それだけではだめだ。
I	・毎日話したい。デイサービス施設があるおかげでつながる、デイサービス施設つながりで親友ができる ・なかったら一人で家に籠ってぼさっとしていた。	・毎日話したい。	広く	・なかなかできないけど、付き合いたい気持ちがある。デイサービス施設がきっかけになる。	・デイサービス施設の人。
J	・他人は予定が合った時でよい。毎日でなくていい。 ・娘は近くにいて、毎日会うので、それが一番いい。	・近所とは挨拶程度、あまり付き合わない。	狭く	・デイサービス施設に来ればいいから。 ・年だから、あまり人のことを聞くのも。	・親戚。 ・デイサービス施設に来る人、人のことも悪く言わないので。
L	・年だからそんなにはいらない。	・深くはいらない。	狭く	・自分も年だから狭くてよい。友だちもバラバラになったから、会いたいというのもない。会えば話をするが。	・家族以外は特になし。 ・娘もそばにいるし、たまに来てくれる。 ・家族が一番。
M	・今は電話ですぐ話すから。 ・毎日もいらない。	・電話で少し話す程度。	広く		・同級生。 ・近所の人は盛岡に行き、会いに行くこともできない。 ・盛岡にいる人とは、今は電話もしない。
N	・なるべく家の中にいないで、できるだけ人と外で一緒にいるようにしている。小さい頃から笑うことが大好き、笑うとバカは治らないと言う言葉があり、言われたが、笑い声が面白いので、あなたの笑い声につられるよと周りの人に言われる。		広く	・色んな人。 ・広く交流していると話をすると、自分の年代にして、変わったなと思うことがある。	
O	・昔は頻繁にしたけれど、手を広げるなと言われる。 ・毎日とかではなく、週一回くらいでよい。 ・自分も年だから。いっぱい友達がいたが、自分も年で、家族にもそんなに手を広げないでと言われる。	・立ち話程度。 ・年が年だから、家の人に迷惑をかけても駄目だから。	狭く	・年だから、あまり広げてもなと思う。	・親戚。 ・親戚がたくさんいるから、友だちでなくてもいい。何かあれば電話があるから。メールなどをしたりするし。
P	・今は特にない。 ・6か月後、娘が上京したら、同級生に会ったりしたい。でも家の仕事もしなきゃいけないから、食事は月に1回はしたいと思う。	・そんなに深くなくてよい。 ・狭く浅くがよい。決まった人、信頼しているにしか相談など、深い話はしたくない。	狭く		・特に交流していきたいなどはない。友人になりたいと思うことはない。自分ばかり友達になりたい、と思ったりはしない。 ・なりゆきに任せて。職場もそれなりに。
Q	・毎日誰とでも。		広く		・全て。
R	・親しい人とは毎日と思う。 ・その他の人は10日に一回でいいかなと思う。 ・何もかも、若いときと違う。	・家の行き来。 ・お茶をのみながら、3時間位、くつろいで話し合い。	狭く		・何でも年だから、と思う。若い人も優しく声をかけてくれて、感謝はするが、交流まではいかない。 ・デイサービス施設の人も、つきあいの深まりは別。感謝して、いい人だなとは思うが、それは別。 ・人を増やすという気持ちはあまりない。今の人と続けたいなと思う。それもただ言葉のやりとりだなと思う。 ・デイサービス施設スタッフの人と個人的に付き合っていうまではいかない。

9. おわりに

住まいと交流を同時に考慮した高齢女性の再建の在り方を探るため，被災者の住まいの再建と交流状況の変化の関係性を明らかにすることを目的とした。住民の多くが分散居住をした岩手県大槌町を対象に，住まいと交流を取り戻すことが困難な高齢女性にヒアリング調査を行った。今回の調査では，結果的に分散していない対象者が過半数を超えた。

対象者は住まいの再建時に住宅の性能より住宅の安全性などの立地や，知り合い・家族の近くに住むなど周囲の人との距離感を重視していた。

交流状況では，立ち話は仮設で交流への意識が芽生えたり，人との距離感が近く交流が増加，維持できた。しかし再建後にはそれらは減少した。一方家の行き来は仮設時に部屋の狭さから減少・消滅し，再建後も取り戻せていない。ここから住宅の性能の問題以外に，地域に馴染むことへの諦めが伺えた。

地域に馴染むことへの諦めは高齢を理由にした交流意欲の低下などの自身を原因とする問題と，交流機会の喪失や，世代・地域間の様々な隔たりなどの相手との双方向性を原因とする問題に分かれた。

地域の交流は減少したが，デイサービス施設などの拠点での交流を得たため，対象者の多くが震災前の親密な付き合いを求めず，現状に満足していた。

このように被災者の交流と住まいの関係性をみたとき，再建時に住まいの性能は重視されていなかった。また，デイサービス施設に通う高齢女性を主な対象としたため，本来住宅に備わっていた機能である接待や交流の機能は被災地で集会所や施設のかたちをとることにより，外部化してきている傾向がみられた。それによって，得ることが困難な近隣との交流を代替えするようになったと推察される。

〔要　約〕

東日本大震災発生から 5 年経過し，被災地は復興過程にある。復興には住宅などモノの復興に加え，地域の交流など人間の復興を同時に考慮するべきである。交流と住まいを取り戻すことが困難な高齢女性を対象に，それらを同時に考慮したよりよい再建を実現する知見を得るため，岩手県大槌町でヒアリング調査から住まいの再建と交流状況の変化の関係性を明らかにした。結果，対象者の多くが再建時に住まいの性能を重視していなかった。また，本来住宅に備わっていた接待や交流の機能は，被災地で集会所や施設のかたちをとることにより，外部化してきている。それにより，得ることが困難な地域での交流を代替えするようになったと推察される。

謝　辞

本研究の調査にご協力頂いた大槌町の方々，デイサービス施設の皆様に深く御礼申し上げる。

引用文献

1)　神戸大学震災復興支援プラットフォーム：震災復興学ー阪神・淡路 20 年の歩みと東日本大震災の教訓ー，ミネルヴァ書房，第 1 版，2015 年 10 月 25 日.

2)　佐久間光恵：東日本大震災　住まいと生活の復興ー住宅白書 2011-2013，ドメス出版，第 1 版，2013 年 6 月 25 日.

3)　関幸子：岩手県大槌町の震災復興の現状と課題，東洋大学 PPP 研究センター紀要，東洋大学 PPP 研究センター，第 3 号，pp.148-168，2013 年 3 月.

4)　伊村則子，阿部一咲子，平田京子：岩手県大槌町を対象とした仮設への分散居住を経た高齢女性の交流の維持と変化の実態－市民の防災力向上に向けて その 64－，日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）（都市計画），7538，pp.1149-1150，2016 年 9 月.

5)　阿部一咲子，平田京子，石川孝重：岩手県大槌町を対象とした仮設への分散居住を経た高齢女性の望む交流とその減少要因－市民の防災力向上に向けて その 65－，日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）（都市計画），7539，pp.1151-1152，2016 年 9 月.

6)　島田恵司：岩手県大槌町にみる東日本大震災の復興課題，自治総研通巻，421 号，pp.1-44，2013 年 11 月.

7)　佐藤栄治：被災者の住宅再建に向けた意向と課題，農村計画学会誌，31 巻，4 号，2013 年 3 月.

8)　陸前高田市：居住意向調査，http://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/kategorie/fukkou/fukkou-keikaku/shinsai-fukkou/shiryouhen/shiryouhen.html，2016 年 7 月 20 日（閲覧）.

9）大槌町：第 1 回大槌町地域復興協議会全体会の報告，http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2012021600433/，2012 年 1 月 4 日.
10）岩手県：「県内内陸地区および県外へ移動している被災者へのアンケート調査」結果，http://www.pref.iwate.jp/saiken/jouhou/18235/040702.html，2015 年 11 月 20 日.
11）若山暖：石巻市における東日本大震災後の居住地選択に関する研究，http://www.jicoojin.com/CEM/wp-content/uploads/2016/02/134.pdf，2016 年 7 月 20 日（閲覧）.
12）野口瑠美子：高層集合住宅における近隣関係研究に関する建築計画的一考察，東洋大学紀要教養学部，第 4 号，pp.43-59，1973 年 10 月 15 日.